仰げば尊し　幻の原曲発見

見逃さなかった Song Echo の書き込み

加 藤 良 一　　2025年3月6日

そうそうたる伊澤 修二（いさわしゅうじ）※研究者によって調べ尽くされた感のある資料でも、こうした新発見があるということは、資料は、あれば事実が見えるというものではなく、あっても事実は見えるものにしか見えないということを思い知らされた。「仰げば尊し」が載っている歌集であることを知っていなければ、この文字の意味するところは分からないので、見逃してしまう。



上の文は、「仰げば尊し　幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡」（櫻井雅人、ヘルマン・ゴチェフスキ、安田寛共著）のあとがき（安田寛）に書かれていたものである。「この文字の意味するところ」とは、『小学唱歌集第三編』「鷹狩」の歌詞草稿（断片）に薄く朱で書き込まれていた手書きの Song Echo の文字をヘルマン・ゴチェフスキ氏が見つけ出したときのことを指している。

「仰げば尊し　幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡」は、2011年、長らく作詞・作曲ともに不詳とされていた「仰げば尊し」の原曲を発見し、調査研究を進めるなかで、「仰げば尊し」が収載されていた『小学唱歌集』（全三巻）のその他の曲の原曲についても詳細な研究を行い、＜『小学唱歌集』全曲の原曲リスト＞としてまとめあげた労作である。

ついに「仰げば尊し」の原曲発見

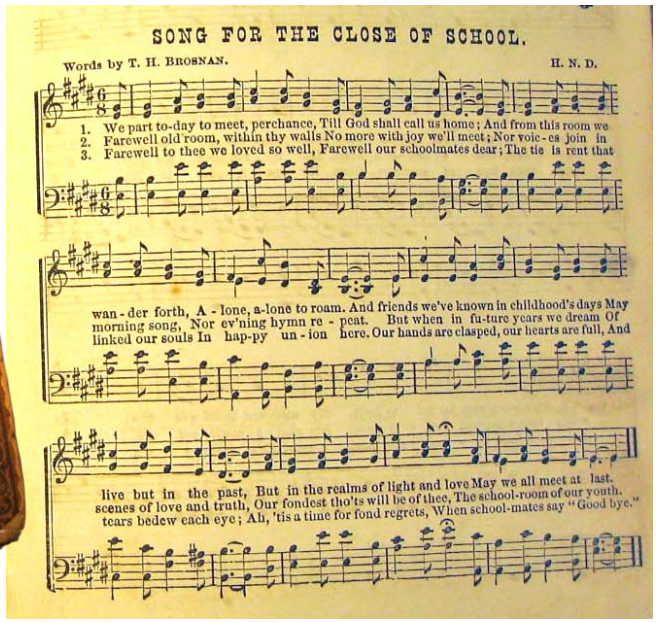
「仰げば尊し」の原曲を発見した櫻井雅人氏は、もともと英米の民謡などの民衆歌謡の研究者だが、唱歌や讃美歌の原曲調査にも係わっていた。原曲調査には多くの先人がいるが、期待するほどの情報は意外とすくなく、不備のある記述も散見され、調査がまだ不十分な状況であった。

※伊澤修二（1851-1917）は、教育者、文部官僚。近代日本の音楽教育、吃音矯正の第一人者。信濃国高遠城下（現在の長野県伊那市高遠町）に生まれる。1875 年師範学校教育調査のためアメリカへ留学、同時に音楽教育も学ぶ。さらにハーバード大学で理化学を学び、地質研究なども行う。聾唖教育も研究する。帰国後、東京師範学校（現在の筑波大学）の校長となり、音楽取調掛に任命され、西洋音楽の日本への移植に尽力、『小學唱歌集』を編纂。1888 年には東京音楽学校（現在の東京芸術大学音楽学部）、東京盲唖学校（現在の筑波大学附属視覚特別支援学校）の校長となり、国家教育社を創設して忠君愛国主義の国家教育を主張、教育勅語の普及にも努める。

2011年1月のこと、櫻井氏はネット上で H.S.パーキンズ編著『Song Echo』に出会った。そのときのことをつぎのように書いている。

…ともかくも中を調べると、知らない曲ばかりが並んでいる歌集であったが、37頁に輪唱曲 The Hunters を発見した。これは『小学唱歌集』「鷹狩」の原曲であり、まったく同一の楽譜であった。他にもここから採られた曲がありそうな予感がして、さらに見ていくと141頁で Song for the Close School にとうとう出会うことになった。「君はこんなところに隠れていたのか」と、喝采をさけんだというよりは肩の荷が下りた気分であった。これで『小学唱歌集』原曲調査の山場を越えた。




SONG FOR THE CLOSE OF SCHOOL.

Words by T. H. BROSNAN. H. N. D.

1. We part to-day to meet, perchance, Till God shall call us home; And from this room we
2. Farewell old room, within thy walls No more with joy we'll meet; Nor voic-es join in
3. Farewell to thee we loved so well, Farewell our schoolmates dear; The tie is rent that

wan-der forth, A-lone, a-lone to roam. And friends we've known in childhood's days May
morning song, Nor ev'ning hymn re-peat. But when in fu-ture years we dream Of
linked our souls In hap-py un-ion here. Our hands are clasped, our hearts are full, And

live but in the past, But in the realms of light and love May we all meet at last.
scenes of love and truth, Our fondest tho'ts will be of thee, The school-room of our youth.
tears bedew each eye; Ah, 'tis a time for fond regrets, When school-mates say "Good bye."

そこでさらに「Song for the Close School」(卒業の歌)について検索エンジンで調査したが、たったの1件しかヒットせず、それも歌集『Song Echo』の目次一覧と、同一名の曲があるという簡単な内容だった。

…振り返って考えると、多くの歌を探してきたのでこの種の「探索」にある程度慣れていたこと、英米の歌集のほうから調べていったこと、インターネットの発達のおかげで日本側の記録に残っていない数多くの歌集の入手も容易になったこと、音楽の素養や研究費がなくてもできる作業であったこと、などが成功の理由であったかもしれない。

著者プロフィール　櫻井 雅人（さくらい まさと）

1944年、栃木県生まれ。東京外語大英米語学科卒、同大学院修士課程修了。一橋大学名誉教授。英語学・英米歌謡民謡論専攻。著書に『英語辞書の比較と分析』他、論文に「唱歌集の中の外国語」他。

このように、音楽学のなかでも原曲を探索する研究は、考古学の発掘調査にも共通している気がする。やみくもに探し回っても労多くして功少なしであろうから、やはり専門家の確かな知識と経験さらに勘の見せどころかもしれない。

また、今さらながらインターネットのパワーにはあらためて感心してしまう。今やインターネットを使いこなせるかどうかで研究の質も大きく変わってしまうことがよくわかる。これはひとつ音楽にかぎったことではない。

そもそも原曲とは何か？

「仰げば尊し」の原曲を発見したというものの、あらためて「原曲」とはそもそも何を指すのか。それが一つしかなければ何も問題ないが、実際には、原曲と呼べるものがいくつか存在するという事態に直面する。

例として『幼年唱歌三編上』(1902年出版)に掲載されている「燕」を取り上げ、古い曲ほど長い歴史のなかで幾多の変遷があり、原曲と決定付けることの困難さを上げている。「燕」はドイツでよく知られた子どもの民謡「Trarira, der Sommer der ist da」(トラーリーラー、夏が来た)が原曲だといえるが、この民謡には多くの変形がある。

> 口伝(くでん)の民謡には常に多くの変形が存在するが、この「トラーリーラー」の場合は早くから印刷された歌詞が普及し、19世紀以後の流行が書かれた歌詞から起こったので、歌詞にはそういう変化がほとんど見られない。それに対して旋律の伝承に断絶があったために複数の新作が現れ、旋律の伝承がいくつか独立した系統に別れた。

このようなことから、「原曲」はあくまでその時点においてのことと、以下のように述べている。

> 古い歌集にある歌の曲が、さらに古い歌集に見つけられない場合、この曲を原曲(original)と呼ぶ。原曲が載っている版を原典(original sources)と呼ぶ。つまり原典とは、その曲が最初に掲載された版のことである。つまりその曲の初出の歌集である。曲は、原典から次々にいろんな版に転載される。それで曲の諸版が生じることになる。しかし、原典を特定することは大抵困難である。結局、見つかった諸版の内一番古い版を原典とすることが多い。しかし、それよりも古い版が見つかる可能性は絶えずある。

著者プロフィール　ヘルマン・ゴチェフスキ

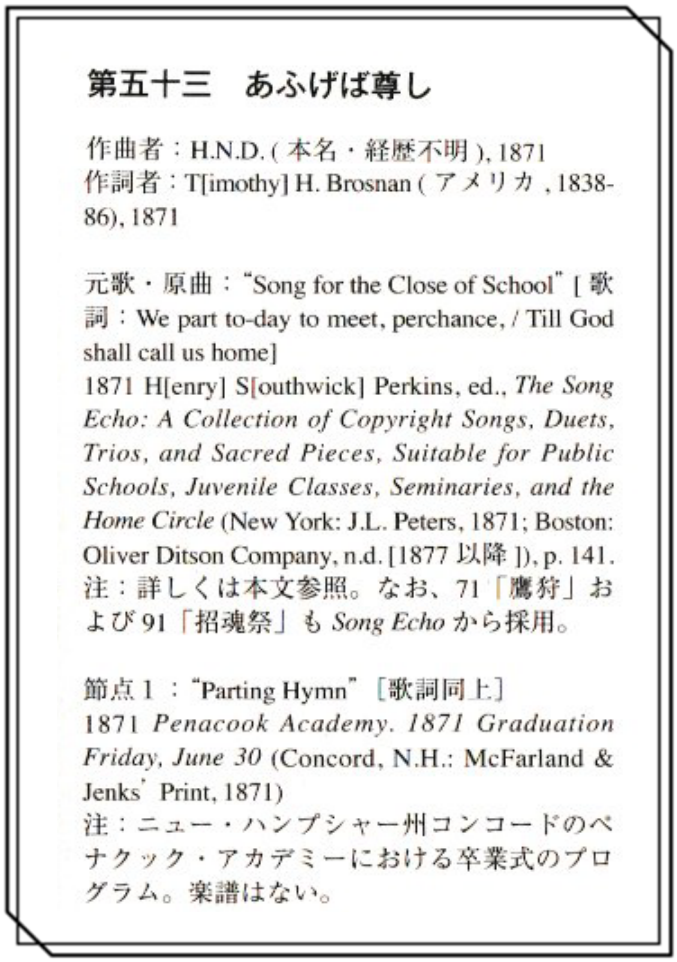
1963年、南ドイツ・フライブルク市生まれ。フライブルク音楽大学でピアノ、フライブルク大学で音楽学、数学、日本学を専攻、博士号取得。2004年より東京大学助教授・准教授。演奏論、19世紀西洋音楽、音楽理論史、近代日本と韓国の音楽史などを研究。著書は英語・ドイツ語が多いが、日本語では編著『東大駒場連続講義　知の遠近法』他、論文は「日本語のリズムと西洋音楽のリズム」他。作曲家としても活動。

「原曲」という言葉は、じつはかなり問題を含んでいるという。『明治唱歌』にある「菩提樹」を例にとると、シューベルトの原曲は芸術歌曲だが、それを易しく編曲したジルヒャー版は民謡になっている。そこで、一般に歌われている「菩提樹」の原曲をシューベルトの芸術歌曲とするか、ジルヒャー版を原典とするかという問題に発展する。著書「仰げば尊し　幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡」では、原曲の定義をつぎのように示している。

「原曲」と言う言葉はこのように、歌の系図の中でさまざまな意味を持つことが分かる。

1. 元歌の曲のこと。
2. 上に述べた原曲(original)のこと。
3. 系図に含まれる同一曲を漠然と差すことがある。
4. 系図に含まれるどれかの曲を差していることがある。
5. 原曲の作曲者と原曲名のこと。

著者らは、「原曲」を主に 1 と 2 の意味で使い、それぞれ「元歌」と「原曲」と表記し、ときに 5 の意味で使うこともあるという。『小学唱歌集　全三編』のすべての曲の系図は巻末にまとめられている。興味のある方は「仰げば尊し　幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡」にあたっていただきたい。



第五十三　あふげば尊し

作曲者：H.N.D.（本名・経歴不明）, 1871
作詞者：T[imothy] H. Brosnan（アメリカ, 1838-86), 1871

元歌・原曲：“Song for the Close of School”［歌詞：We part to-day to meet, perchance, / Till God shall call us home］
1871 H[enry] S[outhwick] Perkins, ed., *The Song Echo: A Collection of Copyright Songs, Duets, Trios, and Sacred Pieces, Suitable for Public Schools, Juvenile Classes, Seminaries, and the Home Circle* (New York: J.L. Peters, 1871; Boston: Oliver Ditson Company, n.d. [1877 以降]), p. 141.
注：詳しくは本文参照。なお、71「鷹狩」および91「招魂祭」も *Song Echo* から採用。

節点 1 ：“Parting Hymn”［歌詞同上］
1871 *Penacook Academy. 1871 Graduation Friday, June 30* (Concord, N.H.: McFarland & Jenks' Print, 1871)
注：ニュー・ハンプシャー州コンコードのペナクック・アカデミーにおける卒業式のプログラム。楽譜はない。

『小学唱歌集』全曲の原曲リストより

著者プロフィール　安田（やすだ）　寛（ひろし）

1948年、山口県生まれ。国立音楽大学声楽卒、同大学院修士課程修了。奈良教育大学教育学部名誉教授。19･20世紀の環太平洋地域音楽文化の変遷を研究。著書に『唱歌と十字架』『日韓唱歌の源流』他。2001年第27回放送文化基金賞番組部門「音楽効果賞」、2005年第35回日本童謡賞特別賞受賞。

今は歌われなくなってしまった「仰げば尊し」

『仰げば尊し』の原曲発見は学問的には極めて重要な出来事だが、現代ではさまざまな理由から歌われる機会が減っている。この曲は、卒業生が教師に感謝し学校生活を振り返るという歌で、とくに明治から昭和にかけては学校の卒業式で広く歌われ親しまれてきた。たぶん40代以上の世代なら、記憶に残る歌となっているはずである。

いっぽうで、1990年代半ば以降、小学校中心に卒業式の合唱曲を『仰げば尊し』から『巣立ちの歌』、『旅立ちの日に』、『贈る言葉』、『さくら(森山直太朗)』などその時々の流行曲に変更する学校も現れている。



https://www.youtube.com/watch?v=PCgzIYNTOfE

「仰げば尊し　幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡」は、第一章「仰げば尊し」その原曲の長い道のり、からはじまり、歴史から消えていた「ソング・エコー」と原歌詞、「仰げば尊し」とその原曲の分析、小学唱歌集や讃美歌とのかかわり、など第十二章を三人で分担して執筆している。さらに、詳細な『小学唱歌集』全曲の原曲リストに至る360頁を超す大部の力作である。

安田寛氏は、あとがきに「共同研究が当たり前に行われる自然科学と違って、人文科学は一人で調べたり、一人閉じこもって執筆するという姿勢が強い。今回の執筆では、お互いの個性を消すことなく、実に和気あいあいと、相互に足りないところを補い合いながら、一冊の本を共同して書くことができたのは、なによりのことだった。」と述べておられたが、なるほどそういわれると人文科学系の著書は単独で執筆するケースが多いようだ。その点、本書は三人の共同執筆により多角的な視点で仕上げられた良書である。

Back　音楽・合唱コーナーTOPへ

Home　Topページへ戻る